

<第3分科会>『関係人口の作り方』

第1部

司会：これより第3分科会、関係人口の作り方の第1部を開会いたします。開会に先立ち、本分科会のコーディネーター並びに発表団体をご紹介します。本分科会のコーディネーターは、ソトコト編集長指出一正先生です。上智大学法学部国際関係法学科卒業。雑誌 Outdoor 編集部・Rod and Reel 編集長を経て、現職に就任しておられます。島根県しまコトアカデミーメイン講師、静岡県『『地域のお店』デザイン表彰』審査委員長、和歌山県田辺市たなコトアカデミーメイン講師、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部、わくわく地方生活実現会議委員、総務省過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会委員などを歴任しておられます。続きまして、発表団体をご紹介します。福島県天栄村長、添田勝幸様より第3のふるさと天栄村のファンづくり。新潟県村上市長、高橋邦芳様より村上市の関係人口への取り組み。以上2事例をご発表いただきます。

それでは指出先生、分科会の進行をよろしくお願いいたします。

ソトコト編集長

指出 一正

皆さん、こんにちは。ソトコトのメディア編集長の指出と申します。今回は、第3分科会の関係人口の作り方というテーマのコーディネーター役を務めます。楽しんで頂ければと思いますので、よろしくお願いいたします。まず第1部は、天栄村さんと村上市さんから添田村長と高橋市長にお話を聞かせていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。スケジュールの流れを先にご説明しますと、まず私からプレゼンテーションを15分ほどさせていただきます。その後、其々の自治的な取り組みとして天栄村の事例発表、そして村上市の事例発表を10分ずつお願いできたらと思います。今日お集まりいただいている皆さんにはチャットで感想や質問、そういったことを入れて頂いて、それに対する意見交換を30分ほどできたらと思っております。

そして最終的に、関係人口というものは一体どういう方向に向かっていくのか、其々の市町村における関係人口のあり方、併せて其々の市町村の皆さんがどのような未来をつくりていきたいのかという所までお話ができたらと思っております。まずは話題提供ということで、私の方から15分ほどお話をさせていただきます。楽しく未来が柔らかくなるお話を持ってきました。ソトコト的関係人口について改めて説明していきますので、よろしくお願いいたします。(1頁、2頁)

僕たちは特にソトコトというメディアを作ると同時に色々な事業を行っています。22年

続いている未来をつくる SDGs マガジン「ソトコト」は、20代から40代の方に圧倒的に読んでいただいております。まちづくりや地域づくり、そしてソーシャルデザインやコミュニティなどに興味がある皆さんから支持を受けています。(3頁)

今、オンラインも立ち上がっていて2年目になります。月間で300万PV以上、それから月間113万のユニークユーザーを達成するなど、広く色々な方に見ていただいております。(4頁)

そして今日は、僕が設計・監修させていただいている関係人口の講座のお話もさせてください。「しまコトアカデミー」は2011年から始まった島根県さんの講座、「たなコトアカデミー」は田辺市さんで行っているものです。今年4年目になりますが、関係人口をつくる首都圏の若い人たちが関わる講座になっています。(5頁)

また、環境省さんとご一緒に、地域の未来をつくるレッスンのための集まりの場なども設けさせていただいております。サステナブルデザインというこれからを形作るキーワードを元に、若い人たちと対話を重ねるような講座もやっていますので、もしご興味がありましたらぜひご依頼いただければと思います。(6頁、7頁)

後ほど、長井市長とお話をさせていただきますが、このような映像の企画などもご一緒にする機会に恵まれています。(8頁、9頁)

最近、山形県の小国町さんと進めている「白い森サステナブルデザインスクール」が動き始めており、非常に好評です。若い皆さんは、循環を考える上で大切な小国町という場所で、地域の皆さんと一緒にまちづくりを考え自然の営みを感じるという講座になっています。小国町で初めて出会う若い人たちが、ここは良い場所だなと感じるとともに、地域の若い人たちと一緒に新しいプロジェクトを進めています。(10頁、11頁)

山形県の金山町さんともご一緒に「カネヤマノジカンデザインスクール」をオンラインで行っております。今年から、やまがたアルカディア観光局とも協力しています。(12頁～14頁)

長井市さんをはじめとする置賜地域の皆さんとも、このような映像のプロジェクト「ライク・ア・バード okitama」を実施しています。これは現代のイザベラ・バードが置賜の女性に出会い、関係性を紡いでいくというプロジェクトです。(15頁)

「8時だヨ！全員集合」のように、奥大和で会いましょうという楽しい映像の企画もやっ

ています。こちらは北陸農政局さんと始めた「たがやすラボ」というプラットフォームです。農業に興味のある農業関係人口の皆さんと一緒にプラットフォーム化を行っています。(16頁～19頁)

実地の話として、「たなコトアカデミー」の例で見ていきましょう。関係人口はどのようにして生まれるのか、ということをごここで説明したいと思います。(35頁)

たなコトアカデミーでは、自発的に地域に関わりたい人たちがこのような素敵なデザインのホームページを自発的に作ってくれたりしていますが、田辺市には田辺営業室という部署があり、手前にいらっしゃる男性お二人が主要な方ですが、この方が東京の若い人たちが地域に関わる道筋を作ってくれたり、サポートしてくれています。(36頁)

その田辺営業室が行っている「たなべ未来創造塾」という田辺市の20代～40代の経営者の皆さんが、町を面白くしたいということで7年間くらい活動を続けています。そして、そのような皆さんと出会うことで関係人口が増えていきます。(37頁)

生産者さんと出会うことで地元の新聞記者さんが応援してくれるなど、仲間が増えていくことでまるで親戚のお兄さんやお姉さんがいる町になったという嬉しい声も頂いています。このように素敵な若い皆さんが田辺の関係人口になっています。(38頁～41頁)

自発的に町に関わることをはじめ、クリエイティブな仕事をしたり、このようにマルシェを共同で出店したりといった感じで、関係人口はファームという一つの括りではなく、仲間やパートナーの形で田辺市の産業と一緒に盛り上げていくような役回りを果たしています。(42頁、43頁)

これは国連のファーマーズマーケットで定期的に行っているマーケットですが、田辺の生産者と関係人口がそろって運営しています。(44頁、45頁)

これは奈良県の下北山村さんで行っている「しまコトアカデミー」です。関係人口の講座は成熟していく中で生まれてくる姉妹講座が多いのが特徴です。(46頁～48頁)

例えばこちらの「むらコトアカデミー」、人口800人の下北山村の南村長をはじめとして、村の皆さんと東京の若い人たちが一緒に村のことを考えていこうという講座ですが、下北山村はこんな素敵な場所ですよと詳しく伝えるより、実体験として感じてもらうような設計になっています。(49頁～51頁)

池が御神体の池神社に行ったり、まだ鬼の子孫が住んでいる前鬼の集落を訪れてみたり。そこで66代続く五鬼助さんという鬼の子孫の家系図に驚愕するわけです。初代が195歳までご存命で、2代目3代目も147とか131歳とか、こんなに長生きした鬼の子孫がいるということに、若い子たちは驚いて、こんな素敵な町や地域と初めて出会った、私が見つけた地域だと言うんです。私が見つけた地域だということが、関係人口が作られていく中でとても大事な視点で、誰かが教えてくれた町や村ではなく自分で見つけた町や村にどんどん関わりたくなっていきます。(52頁、53頁)

このように、お母さんと一緒に料理を作ったり、何ができるか考えたりするようになります。こうして東京などの都市から来る若い人たちが成長していくと同時に、若い人が現れることで町や村の皆さんにも変化が起きることを期待して、このような講座を作っています。(54頁～58頁)

例えば下北山村の場合は、若い人たちが大勢で2泊3泊どころか1ヶ月間くらい滞在するようになってきて、村の皆が心配して若い人がもっと泊まれる場所を作った方が良くとゲストハウスを3棟造ってくれたことで、経済的にも安心して滞在できるようになりました。(59頁)

村は、働き盛りの人たちがやって来るのであれば働ける場所も用意した方が良くということで、コワーキングスペースを造りました。あっという間に人気の場所になって、ベンチャーの男子女子がここに常駐するようになりました。(60頁～61頁)

夜は、村長を囲んでご飯を食べながら、都市から来た若い人が村のことや村長が思い描く未来を学ぶ、これこそまさに成長という言葉がふさわしいのではないのでしょうか。(62頁～64頁)

「むらコトアカデミー」受講生のOGが、このような転地療養型のサービスを起業してくれました。村で過ごすかけがえのない時間が、都会の若い人にとって今までに感じたことのない魅力です。心が疲れてこれ以上都会で働くのは大変かもしれないと感じた時に下北山村に行って、何ヶ月か滞在することで自分にふさわしい暮らしはどこにあるのかを見つめ直してもらい、そのような転地療養型のサービスが一昨年くらいから動いて好評を博しています。(65頁)

この真ん中の方が東京から移り住んでこのベンチャーを立ち上げたモリタさんで、関係人口講座の卒業生です。関係人口は、地域を盛り上げていく仲間であり、実は主体性を伴った当事者でもあります。移住定住の枠には収まらず、観光以上移住未満の第3の人口という

曖昧な場所にある関係人口ですが、地域の中でこれまでにないビジネスや事業を生み出す新たな存在となっています。(66 頁)

これ最近、奈良県さんからご依頼いただいて関係案内所をつくるというプロジェクトです。素敵なママがいて落ち着くスナックで家に帰る前に 1 杯飲んで帰るといったことをされている方もいると思います。これを関係案内所として、今奈良県の奥大和エリアにつくっています。(67 頁、68 頁)

関係案内所というのは、MIND TRAIL という芸術祭の中のプロジェクトです。関係案内所は観光案内所ではなく人と人との関係を案内する場所であり、関係人口と等しく大事な場所です。地元の林業の偉い人であったり、移住して間もない 20 代の女の子であったり、皆が自由に会える場所としてスナックを設計しました。このようなスナックを現在 3 軒運営しており、アートを見に来た女性が林業に興味を持つ、まちづくりに興味を持つということが起きて始めています。(69 頁～72 頁)

最近の新しい関係人口をいくつか紹介させてください。「流域関係人口」といって、皆さんのエリアにも大きな美しい川が流れていると思いますが、そういった川同士に新しいコミュニティが生まれています。(73 頁～76 頁)

最上川や雄物川、筑後川のエリア等で、市町村を越えて若い人たちがお互いのスキルを持ち寄ってマルシェを開いたり、どこかの町で何かをやる時にそのプレイヤーやヒーローやヒロインを手伝いに隣の流域の町からやって来るようなことが起きて始めています。これを「流域関係人口」と名付けました。元々ハイウェイであった流れを通すと、実はお互いのことが分かり合える同じような例えば言葉を共有していたり、似たような感覚で動いていたということが多いため、流域圏の中で関係人口が生まれているというのが最近の傾向だと思います。(77 頁～91 頁)

そしてコロナ禍で生まれたものが、もう 2 つあります。1 つは「地域内関係人口」です。これは宇都宮の例ですが、大きな移動が許されないからこそ、地域の中で関係している人たちが隣の町でも同じような気持ちを持ってリノベーションしている若い人を見つけて一緒に活動していく、これも 1 つの関係人口です。(92 頁～96 頁)

そしてもう 1 つは「オンライン関係人口」で、足を運んだことはない町の人たちとオンラインで出会うことで実際に足を運ぶ動機になり、オンラインでプロジェクトが生まれたりしています。例えば秋田県湯沢市の「ゆざわローカルアカデミー」で私は講師を勤めていますが、こちらの卒業生が、湯沢を訪れることはないのにもかかわらずクラウドファンディン

グで 110 名以上の方から 80 万ほど集めて、湯沢のクラフトビールを作りました。直接足を運んでいない町に単に思いを寄せるだけではなく、経済的なプロジェクトも生まれるようになりました、湯沢のリンゴ農家さんを救うというプロジェクトで生まれたクラフトビールを私も購入しました。(97 頁～105 頁)

最後にまとめの話として、関係人口はどのようにして作られるのかを 4 箇条にしました。先ほどのスナックのように、関係案内所があるかどうか、人と人が出会うことで関係が紡がれる場所が大事です。そして、その村や町に都会からやって来て関わる皆が、そこで未来をつくっているということを感じているかどうか。そして何よりも、お手伝いではなくて自分事として村や町で行われているプロジェクトに関わって楽しいと感じているかということが大事です。もう一つは、これは双方に言えることなのですが、関係人口とそれを受け入れる側とが互いに仲間という認識をもつ、つまり天栄村に仲間がいる、村上市に仲間がいると思えるかどうかがとても大事なことだと思います。(141 頁)

まずは話題提供ということで、私の方から、ゆるふわな関係人口の話をさせていただきます。ここからは、天栄村の関係人口の取り組みについて添田村長に 10 分間ほどプレゼンテーションをお願いできればと思います。添田村長よろしく申し上げます。(142 頁、143 頁)

福島県天栄村長 添田 勝幸
『第 3 のふるさと 天栄村のファンづくり』

皆さん、こんにちは。只今ご紹介いただきました天栄村長の添田でございます。これより「第 3 のふるさと天栄村のファンづくり」の取り組みについて説明させていただきます。(1 頁)

はじめに、天栄村の概要について説明をさせていただきます。天栄村は福島県の中通り南部に位置し、東京からのアクセスは東北新幹線を利用することで約 2 時間、車では東北自動車道を経由し約 3 時間です。人口は 5,060 人、世帯数が 1,722 世帯です。(2 頁)

天栄村の気候風土は村の中央にある分水嶺を境に分かれており、西部地区は冬期の積雪が 2 メートルにも及ぶ日本海側の気候で、温泉地やスキー場・キャンプ場・ゴルフ場など観光エリアが広がっており、年間を通じて多くの観光客が訪れています。東部地区は積雪が少ない太平洋側の気候にある肥沃な耕地が開けた農村地帯で、環境の保全に配慮しながら天栄ブランド農産物である天栄米を生産すると共に、近年は工業団地への企業進出が進んで

います。(3頁)

関係人口創出の背景及び地域の課題について、グラフを見ていただくと分かる通り、本村でも他の地方と同じように人口減少・少子高齢化が進んでいます。特に西部地区が顕著で、産業の維持や集落機能の低下が課題となっています。(4頁)

このようなことから、村では移住定住の推進と関係人口の創出を積極的に進めてきました。まずご紹介するのは「田んぼのパートナー制度」です。この事業は、東日本大震災からの復興を支援するために、村とご縁のあった首都圏の企業のCSR活動の一環として平成27年度から始まったもので、安全で安心な日本一おいしい米づくりを目指す生産者の活動に対して支援金を募り、収穫後の天栄米を返礼するというものです。この事業には毎回多くの方々が参加しており、お米の返礼だけでなく、米づくりなどの農業体験や新鮮な旬の食材を使用した料理でおもてなしをするなど、参加者に来て見てふれ合って楽しんでいただくことをモットーに取り組んでいます。会社の役員や社員の家族での参加も多く、大変好評で現在も継続している事業です。また、企業のノベルティとして天栄米を使用させていただいており、それが村のPRにつながっています。このように、復興支援から始まった「田んぼのパートナー制度」は、関係人口創出事業の先駆け的な取り組みとなりました。(5頁)

平成30年度には、総務省の関係人口創出モデル事業を活用し、天栄村に興味を持つ方に、セミナーツアーや現地視察に参加していただき、天栄村のことをより知ってもらうことで関係性を深め、その後も村に関わる関係人口の創出に努めました。写真は、セミナーツアーの際の講演と地域課題についてのグループワークの様子です。(6頁)

次に取り組んだのは、「天栄ファンクラブ」の創設です。このファンクラブは、天栄村にゆかりのある人や関わりを持ちたい人にイベントなどの様々な情報提供を行い、利用できる優待特典や気軽に関わることができる機会を提供するもので、平成30年度のモデル事業の時に立ち上げたものです。また首都圏の大学生が伝統行事や運動会など地域イベントに参加し、地域住民と交流を深めながら地域課題を共有し、活性化するための活動も行っています。(7頁)

具体的には、人手不足を補うための農地の草刈りや、農作業への支援など若者の力を活用した地域づくりを進めています。そして、これらの大学生の活動をサポートするため、村と企業が人材育成の協定を結び、村、企業、大学生それぞれメリットがある良い関係へと発展しています。(8頁)

昨年から新型コロナウイルスの感染拡大により関係人口の事業は縮小を余儀なくされて

いるところですが、コロナ収束後の事業展開として大きく3つを考えています。1つ目は、関係人口現地体験ツアーの再開です。コロナ禍により中止しておりましたが、収束後は体験ツアーを再開し、天栄村に来ていただけるよう、きっかけづくりのイベントを企画していきたいと考えています。(9頁)

2つ目は、地域の課題解決への若者の関わりを支援することです。大学生が地域住民と接することで普段は味わうことができない経験の機会を充実させ、若者の力で地域の活性化を図っていききたいと考えています。これも現在はコロナ禍で中断していますが、大学生が空き家の改修を立案して自ら改修するという地域の拠点づくりを進め、改修した空き家を地域交流や首都圏の人々の体験の場として活用していく予定です。また、大学を卒業した後も継続的に地域との関係を維持するための支援をしていききたいと思っています。(10頁)

3つ目は、「天栄ファンクラブ」の充実です。コロナ禍でも関係人口を維持・創出していくため、それぞれの会員がSNSなどで情報を発信しており、新たなきっかけづくりの素材としてオリジナル手ぬぐいも製作しています。また、関わり維持に向けてお知らせやイベント情報をタイムリーに発信する情報誌を毎月会員向けに発行しています。今後は、これらに加え、会員の皆様に来村の機会を提供する体験プログラムなど関係性を深める機会を設けていく予定です。これらの事業は、地域おこし協力隊として村を訪れ、そのまま移住した女性が大きな役割を果たしているため、こうした人材が関係人口づくりには欠かせないものと感じているところです。(11頁)

その他、関係人口づくりについて紹介させていただきます。1つ目は「羽鳥湖高原ウォーク」で、年2回夏と秋に開催しており、県内外から各1,000名を超える方々の参加があります。2つ目は、令和元年9月28日から10月6日にかけて開催した「FICCオートキャンプ世界大会」で、この大会には世界14ヶ国から約800人のキャンパーが訪れており、このようなイベントを通じて天栄村の魅力を発信することで関係人口の創出へと発展させています。また村には、米食味分析鑑定コンクール国際大会において10回の金賞に輝いた天栄米、全国新酒鑑評会で金賞を受賞した村内の2つの蔵元が醸造する日本酒「廣戸川」「寿々乃井」などの特産品があり、その魅力や話題の発信も関係人口創出のきっかけにつながっています。(12頁)

関係人口づくりには、交流や情報発信によるつながりなど、人と人をつなぐ関係づくりが何よりも大切であると感じています。そして築いた関係を今後も活かし、地域への支援や人材づくりを進めることで持続可能な村づくりを進めていきたいと考えています。以上が天栄村の事例発表となります。ご清聴ありがとうございました。(13頁、14頁)

指出先生：添田村長、ありがとうございました。関係人口づくりとして様々ことに取り組まれていることがよく分かりました。感謝申し上げます。後ほど意見会などでもお話をお聞かせください。それでは続きまして、新潟県村上市の高橋市長より村上市の取り組みについてご説明いただければと思います。高橋市長、よろしく願いいたします。

新潟県村上市長 高橋 邦芳 『村上市の関係人口への取組』

皆さん、こんにちは。新潟県村上市長の高橋でございます。私の方からは、本市の関係人口の取り組みについてお話をさせていただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

まず村上市も人口が減少する自治体の 1 つであり、次世代につなげるサステナブルで持続可能な取り組みを進めているところです。まず村上市の地勢を含めた背景、その後で関係人口拡大のためのアプローチについてお話させていただきたいと思っております。村上市は、平成 20 年に 5 市町村で合併し、日本海に面した海岸線 50 キロなど県内行政区域として 1 番大きな面積に 274 の行政区が存在するというので、広大な面積の中に人口が点在している状況です。また、高齢化率 39.49% と示されていますが、一番高い所では既に 50% を超えている一方で 20% 台の全国平均よりも下回っている地域もあるということで、これが行政運営にも困難を生じさせている要因であると常々感じています。(2 頁)

まず自然ですが、ご覧の通り多様性に富み、海からは朝日連峰まで縦距離にして大体 20 キロの間に突然 1,200 メートルを超える高い山々から海に注ぎ込むという急峻な地形があり、逆にそれが大きな魅力を生み出すと考えており、また、現在城下町としてのまちづくりも進めています。(3 頁)

伝統と文化ということで、従来からつながってきた屋台行事などの伝統があり、新たに地域の皆さんが創出された人形様巡り・屏風まつり・竹灯籠まつりなどの行事等、歴史と現代のまちづくりが共存している自治体と言えるのではないかと思います。また、下方にあるのが伝統的工芸品の木彫堆朱と羽越しな布、居繰網漁という村上の 1200 年を超える鮭の文化などの地域に根ざす伝統的産業が市の産業の核を成しています。(4 頁)

キラコンテンツとしては鮭と酒、村上牛とお米、越後本ズワイ・白皇鮭という形で新しいブランドも立ち上げています。また、スポーツの分野では、つい先日のごとで記憶にある

かと思いますが、東京オリンピック・パラリンピックで初代金メダルに輝いたスケートボードのナショナルチームの事前キャンプが行われたのが村上市のスケートパークでした。村上市は冬と夏の大会に挑んだ平野歩夢選手の出身地でもあり、生涯スポーツについてももしっかり取り組みを進めています。(5 頁、6 頁)

本日お話しする取組の背景ですが、1950 年代をピークとして現在まで人口減少が続いている状況で、1990 年に年少人口と老年人口が逆転したということです。国としては 2010 年頃がピークだったので、村上市はそれより 30 年も早く人口減少社会に突入しています。(7 頁)

このような背景の中で、集落の維持や地域行事の存続に対する不安や諦めが非常に出てきました。その対策として、20 年の合併の際に市内に設置した 17 のまちづくり協議会を中心として市民共同のまちづくりとして自らが自治運営を行うイメージで共同体が設立されました。これは市税の約 1%である 6,000 万円を人口に応じて配分して自由に使っていただくという仕組みで、現在これを核にしながらかつて色々な取り組みを進めています。(9 頁)

そして、まちづくり協議会と NPO 法人を中心とした地域づくり団体が行政と連携してアプローチをしていく仕組みづくりに取り組んでいます。そして行政が主体的に取り組む形で、関係人口である市出身者・市を応援してくれる人・都市部に住む若者とのつながりを深めていく形で連携を進めています。将来的にそれがサイクル、サークルになるような協働を構築するために、現在は受け入れ体制の下地づくりを行っています。(10 頁)

徳島大学の田口准教授に講演いただき、この取り組みをスタートさせました。一つの具体的な事例として平成元年に「村上ファン倶楽部通信」を立ち上げ、現在 1,491 人の登録者に向けて SNS を中心に様々な発信をしています。(11 頁)

それと同時に、コロナ禍で村上に帰省できないという状況を支援するために「学生応援便」を行ったところ、このようなメッセージと共に非常に大きな反響を頂きました。村上の場合、学生が外に出たまま帰ってこないという状況がありましたが、帰ってきたいという意識付けに非常に強く貢献したと思っています。(12 頁)

各地区の個別の取り組みを見ていただきたい。村上地区の海岸線では「オレモオメモ」という団体を中心にして、学生を中心に市外から様々な方に入ってきていただくという取り組みをしています。(13 頁)

その下の神林地区でもインターンの受け入れなどを行っています。ここでは実行委員

会を立ち上げ、地元と密着しながら人口創出のきちんとしたシステムづくりを目指して取り組んでいます。(14頁)

北の方の一番高齢化が進んでいる地域では、合併前から「百姓やってみ隊」という取り組みを行っており、都市部と農村部の連携の中で関係性がどんどん膨らんでいます。その下は、「お米レター」というもので、従来インターンとして受け入れてきた学生の皆さんにコロナ禍で中々会うことができない状況をお米レターという形でつないでいます。(15頁)

これまでの成果と今後の課題を整理させていただきます。事業終了後も地域に関わる参加者が34%に上がったこと、地域の活力アップとして地元の方々が新たなことに気づき活力につながったこと、そして地域まちづくり組織として既存の集合体との連携が出来上がってきたことが成果として挙げられるとともに、他方、課題としてはこれを継続しさらに深掘りをしていくことが挙げられます。(16頁)

村上市は1,174平方キロという広い範囲に274の集落があります。先ほど基調講演の中でも集落のあり方を考えてはいかがかという話があり、非常に重要なポイントだと思っています。しかしながら、地域の受け入れ態勢がしっかりしていない所には定着しないため、地域おこし協力隊のようなものを定着させていくための受け入れスタンスの充実を地域における重要課題として捉えています。(17頁)

これらの成果をブラッシュアップしながら、まず小さいながらもこのサイクルを継続していくことが重要であり、これが結果として市全体の活性化につながっていくというイメージをしっかり持ちながら市民の皆さんとの関係を構築していくことが本市の取り組みです。合併してから13年経過していますので、このような取り組みを色々とブラッシュアップしながら1年、2年、3年と続けていくことで地域の活力や魅力につなげていきたいと考えています。(18頁)

まとめとしては、持続可能な村上市の実現に向け、関係人口への取り組みを更にしっかりと進めていこう、村上市の明るい未来に向けて、多くの若者たちと共にしっかりと取り組みを進めていきたいということです。以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(19頁、20頁)

質疑応答

指出先生：

高橋市長、ありがとうございました。今、お二方のお話をお聞きして参加いただいている皆様はどうお感じになったでしょうか。よろしければ、感想や質問等、添田村長と高橋市長にぜひ聞いてみたいことをチャット欄に入れていただければと思います。では、意見交換会として、まず添田村長のお話を聞かれて、村上市長の高橋さんはどうお感じになられたでしょうか。

高橋市長：

非常にピンポイントで、しっかりとした取り組みをされていると感じると同時に、環境が違ふと取り組む方向性や方法も随分違ふという印象を受けました。また、村上也雪が降り四季がはっきりしている地勢である点等、共通する点も非常に多いと思いました。特にお米が長らく重要な特産品として評価も高いという事で、村上市も優良な岩船産コシヒカリがあってそれで醸造されるおいしいお酒もあるので、しっかりと磨き上げて大きな効果を生むような形にしていければ良いとお聞きしていました。そのような取り組みによって関係性ができるとということで、天栄村さんとともにしっかりと目指していきたいと思いました。

指出先生：

ありがとうございます。それでは、添田村長は村上市の高橋市長のプレゼンテーションをご覧になり、どのような感想をお持ちになりましたか。

添田村長：

天栄村には若い人が少ないので、若い方が中心になって民間の団体やNPOと一緒に活動している姿が見えて非常に素晴らしい取り組みだと思います。当村にもNPOがありますが若い方が少ないため中々十分な活動ができておらず、首都圏から若者を呼び込んで地域活力に合わせていく取り組みを進めているので、村上市の取り組みを参考にしながら発展させていきたいと感じました。

指出先生：

私は天栄村さんと村上市さんの大ファンで、天栄村さんはカッコいいなと、村上市さんにはよく家族でイヨボヤ会館や山熊田にもお邪魔をするので、良い場所だなと、色々ご一緒できたら嬉しいと感じています。少し質問をさせていただこうと思います。関係人口を理解してもらうことがまず町の人たちにとって大事な所だと思いますが、添田村長、高橋市長ともに関係人口の理解のようなものが村や市の中で高まり始めていると感じる所はありますか。双方の行政区の町に暮らす皆さんは、割と関係人口を理解し始めている感じでしょうか。まずは、天栄村の添田村長いかがでしょうか。

添田村長：

人口減少の中で移住定住を進め、首都圏から結構若いご夫婦などに移住していただいて、1, 2年はいいいのですが、田舎なので地域になじめない、夜遅くまでバーベキューをして、周りに迷惑をかける等色々問題が出てきている。そのような中で、関係人口という、来る方そして受け入れ側もあまり負担を感じることなく気楽に迎え入れることができる、そのような取り組みの情報発信が徐々に浸透してきています。あとは、移住コーディネーターで、地域おこし協力隊として首都圏から来た女性がいますが、この女性が各集落を回って PR をしてくれているので、大変浸透しつつあると思っています。

指出先生：

ありがとうございます。今、村長がおっしゃった所は僕も同意する所で、ほどよい距離感で地域と関わる人たちが増えた方が負担にならないというのは人の常だと思います。その意味で、移住定住の皆さんと合わせて、地域に定期的に関わる少し緩い関係性の人たちが仲間として増えていくのは大事だと思っています。その理解が進んでいるというのは何よりだと思いました。ありがとうございます。では、村上市の高橋市長いかがでしょうか。

高橋市長：

関係人口と交流人口はよく比較されると思いますが、交流人口というのはかなり色々なアプローチの仕方があったと思います。村上市においても、例えば交流人口を拡大させることで地域経済を刺激することはこれまで色々取り組みを進めてきました。その結果、コロナ禍の前ではありますが年間 250 万人を超える来訪者がありました。村上市の瀬波温泉にはピークで 45 万人宿泊があり、子どもの入湯税をカウントしていませんので子どもも含めると 50 万人はとうに超えていたと思いますが、それが現在 25 万人前後になっています。それと同時に、平成の初めの頃から「都岐沙羅パートナーズセンター」という中間支援組織に色々な形のまちづくりを進めてきていただき、それを中心にして関係人口という概念が広がってきました。先ほど指出先生のお話でも「私が見つけた地域」という感覚が必要だということで、そのように見つけていただいた方々が地域に定着しました。大変な高齢化の進む集落ですが、定着するだけではなく、周りに刺激を与えながら活性化に努めていく動きのようなものが多く出てきました。そうすると、その方々の取り組みが、今までの自分たちの地域のことは中々見れていなかった元の市民に刺激を与えその方々の元気につながっている、こうしたものが真の関係人口なのかなと職員と話をしながら政策を進めています。また村上来なくても、私の就任後に始めたふるさと応援寄附金、スタート当時はまだ 2,000 人から 3,000 人くらいの納税者だったのですが、コロナ禍でも減ることなく現在 1 万 9,000 人を超えています。この方々は村上の応援をしてくれる納税者ですので、こういった関係のあり方も一つの関係性です。市に入っつながるという関係だけではなく、こういったつながりも含めて、色々な関係人口というものの切り口があるなと思っていますので、その形をこれからも進めていきたいと思っています。非常に関係人口の力というものを感じていま

す。

指出先生：

ありがとうございます。チャット欄に磐梯町の佐藤町長から質問を頂きました。ありがとうございます。この質問について、お二人にお答えいただけたらうれしいと思います。読み上げますと、関係人口づくりでどの程度行政はサポートしていますか、またサポート内容としては、人・施設・お金あたりでしょうかという質問が来ています。では、添田村長にお答えいただけたらと思います。

添田村長：

人のサポートとしては、当然職員が担当したり天栄村に地域おこし協力隊で来ていただいた移住者の女性が当たっています。また天栄村では「ふるさと子ども夢学校」というのがあり、こちらが教育で受け入れるという体制です。コロナ禍や福島の東日本大震災・原発事故があつて中々難しいなかで、こちらの組織が受け入れ態勢を取りながら進めています。当然施設も提供していますし、そのための支援もしています。先ほどもお話ししたように、首都圏の大学生が地域に入って様々な活動をしているのですが、当然学生なので資金面も厳しいということがあるので、村とその学生を応援している首都圏の企業で一緒になってその支援をするなど、村としてはそのようなサポートをしております。

指出先生：

ありがとうございます。それでは、村上市の高橋市長いかがでしょうか。関係人口づくりで、行政はどの程度サポートされおり、そのサポートの内容はどのようなものでしょうか。

高橋市長：

村上市では、例えば移住につながった方々に対して、改築費用など移住に係るサポートとして財政的な支援をさせていただいています。それとソフトでの支援という事で地域とのマッチングをしっかりとさせていただき、OG・OBなど先行している方々との連携をサポートして先輩方のノウハウを聞いていただく事などの支援です。あとは、先ほど申し上げた中間支援組織「都岐沙羅パートナーズセンター」というNPO法人にも色々な形で指導を頂いています。また、現在地域おこし協力隊を中心にして定住につながっている方々もいますので、そういった方々のノウハウですとか、実は色々な形でコンテンツも作っていただいてSNSを中心に情報の発信もさせていただいています。関係人口として村上市を選択する方々は、どんな所なのか右も左も分からない、情報だけで来ていただきますので、そこでウェルカム形の関係性を作っていくようなサポートが一番重要であり、それとセットで財政支援もあるとなると、そこまでしてくれるのかと一歩インセンティブも働くのではと感じています。

指出先生：

ありがとうございます。佐藤町長、良い質問をありがとうございました。一つの話題提供として、私は行政の皆さんから関係人口の講座ということで事業として請け負う形で仕事をする場合が多いのですが、その場合、意識的に受講生の皆さんに受講料を設定してその金額を払っていただくようにしています。これには2つの側面があり、無料よりはお金を払った方が全部に参加する意欲が湧くということと、もう1つは同じ講座を受けているという仲間づくりにつながるということで、プロパーの講座を同じようにお金を払って受けている、お互い同じ想いを持った仲間だと感じることです。受講生同士が、例えば天栄村や村上市の関係人口を仲間として関わりを深めていくという仲間意識を作るために、比較的有料でつくる場合がある。そういった意味では、今磐梯町長さんがおっしゃったことに対する答えの1つになるかと思い、今お話しさせていただきました。

では、もう少しお話を進めていきたいと思えます。次にお聞きしたいのが、関係人口の中でも、特に地元出身の若い人というジャンルがあると思えます。地元出身の若い方々が東京など他の地域にいる場合に地元の今の情報をより伝えるなど、関係人口化していくためにお二方が意識していることはなんでしょうか。まったく関係ない所からやって来る若い人と元々血縁や地縁がある若い人たちと、おそらく関係人口には二層があると思えますが、元々地元の皆さんに地元の魅力をどう伝え関わっていただくきっかけを作るか、改めて教えていただけたらと思えます。では、添田村長からお願いします。

添田村長：

先ほども申し上げたように、SNSでの村の情報発信をしているのと、東京を中心に首都圏に天栄村から集団就職で行った方々のふるさと会があります。ここもだんだんと高齢化してきていますので、毎年開催していましたがこの1、2年はできませんでした。息子さんやお孫さんをぜひ関係人口にとPRをさせていただき取り組みの中で、希薄になった田舎とのつながりを今度は息子さんやお孫さんでつないでいきたいとお話をさせていただき、村の情報誌も送って息子さんやお孫さんにもお渡しくださいと取り組んでいます。

指出先生：

県人会、地元の会の年齢がどんどん上がっていき、若い人たちは若い人たちの集まりのようなものが各地で生まれている傾向がありますので、そういう所から関係人口が村や市に増えていく流れが大事かと思ってお聞きしました。では高橋市長、いかがですか。

高橋市長：

先ほど触れましたが若い人材が高等教育を受けるために都市部に出ることは当然だと思います。そこから地元に戻るという選択肢をどのように選んでもらうか行政はずっと悩み続けているのが本音だと思っています。特に女子は帰ってきませんが、女子が帰ってこない

と中々大変な状況になりますので、これは少なからず多くの自治体が抱えている問題の1つと思っています。先ほど今回コロナ禍で学生は帰ってこれないので大変だろうから応援しようじゃないかと、これは職員の発案だったのですが、村上の特産品など、ふるさと納税で返礼品を選択できるように、選択できる形で学生応援便を行いました。お米やお惣菜をセットで贈るパターンはよくありますが、村上のふるさと応援寄附金のサイトの品目の中から本人が欲しいもの、スイーツでもいい、お米でもいい、肉でもいいという形で行いました。すると、実際に東京にいる村上出身の子どもたちがスイーツを応援便でもらい、それを仲間であるよその自治体の出身の子どもに分けてなんとかしのいできた、とてもありがたかったという意見を頂きました。大多数の子どもたちから、うれしい、村上市の出身で良かった、頼もしく感じたという意見をたくさん頂きました。それで現実には、実は首都圏で就職を決めていたという子どもが帰ってきて村上で就職をしてくれることになりました。このようにふるさとの気持ちをしっかりと届けるというのは重要だと思うので、コロナ禍の後も引き続き盆暮れの付け届けのような形で学生とつながっていこうという話を職員とさせていただいており、これが若い人たちが戻ってくる1つのきっかけにつながったと思っています。それと一番大きいのが、先ほど冒頭の写真コンテンツで見ていただいたお祭りです。各集落に大なり小なり色々なお祭りがありますので、お祭りが開催される時に帰ってくる。ですから、こうした地域の伝統芸能とのつながりが非常に重要だと常々考えており、しっかりと連携していきたいと思っています。

指出先生：

高橋市長、ありがとうございます。先ほどのふるさと応援のセットが若い人たちに届けられるのは、今の社会で皆さんがとても気にかけている所だと感じました。実は、仕送りの文化が若い世代には中々なくなっている中で、20代30代の若者は仕送りを体験したいと思っているので、関係人口を増やす上で仕送りという心温まる行為を行えないかと思っています。山形の金山町さんの関係人口になったある女性の方が、この仕送りの様なことをプロジェクトにしようとしているのを今思い出して、今、高橋市長のご発言のようなことが、若者の気持ちをしっかりとつなぎ止めたり動かしたりするのではと思いました。

では、もうすこしお話を進めたいと思います。全体まとめの10分を頂いていますが、それよりも添田村長と高橋市長にお話を聞いた方が面白いと思うので、もう少し進めさせてください。地域に関わりたいと思うひとつの目安として「関わりしろ」という言葉があり、町や村や市にその関わりしろがあるかどうかで、若い人たちが関係人口になりやすくなるかどうかが変わってきます。関わりしろとは、ツルツルピカピカではなくザラツとした感じとよく言われがちですが、この場所で何か自分もやってみたいと思えるような余白があるかどうかとも言えます。そうした意味で、添田村長、高橋市長にお聞きしたいのは、天栄村さんや村上市さんにそのような関わりしろがどのような場所にあるかということをお話いただければと思います。では、添田村長いかがでしょうか。

添田村長：

先ほども申し上げたように、首都圏から来た大学生が空き家を見て、自分たちで改修して拠点にしていくという取り組みをしたり、学生が企画立案したものをどのように我々が実現させていけるかというところだと思います。学生がそこで作業していると、地域の方々が「何をやってるんだ」ということで、結構お婆ちゃんやお母さん方が色々な料理を持ち寄って来るんです。そこでまた色々な話をされて、皆さんが今度はお爺ちゃんやお婆ちゃんが困っている農作業の手伝いをする、学生がこんなことに取り組んでいきたいと言ったらそれを地元の方々がサポートしていくというやり方が色々と提案をされています。子どもたちが様々な遊びをやりたい、そこに学生が関わる、そしてその学生のサポートをするのが地域の方々という流れが今できてきていますし、学生からこういう地域に住んでみたいというお話も頂いていますので、今後地域との関わりが第2、第3のふるさととなるようにつなげていければと取り組んでいます。

指出先生：

添田村長に重ねて質問したいのですが、関係人口が増えていくと何が起きると思いますか。そして、例えば天栄村さんに関係人口が一定数持続するためにどのようなことが必要で、どのような課題があるか、その辺りのことを教えていただければ嬉しいです。

添田村長：

正直継続させていきたいとは思っていますが、当然、学生が社会人になる過程で、学生の時思っているのと社会に出て実際の生活が変わると中々そこは難しいと思います。天栄村の中でも起業する、あるいはどこかの観光施設やリゾート施設などで勤めながらできる仕組みづくりができれば、皆さん農業も憧れはあるし、半農半Xという言葉があるように、そういう所で生活ができるような関わりを持ちつつ、次々に学生がまた訪れて、地域の新たな発見、自分たちが気づき、今度は社会人になった時にそれが役に立つような仕組みづくりが出てくれば、もっと広がってくると思っています。

指出先生：

ありがとうございます。私も村長とまったく同じ悩みを関係人口の講座で感じています。大学生が関わってくることは大変に面白いのですが、就職するとガラッと環境が変わるので継続は中々難しいですが、その一方で、20代30代で仕事を持っている人たちは比較的緩やかに継続的にその地域と関わってくれると感じています。大学生が関わることはとても面白いと同時に、ガラッと変わる社会環境の変化に、どう行政や私のような人間が理解して、変わらない関係性を保てるかどうかは課題だと思いお聞きしました。では、村上市の高橋市長いかがでしょうか。関わりしろはたくさんあると思います。

高橋市長：

おっしゃる通り関わりしろは沢山あります。関わりしろという概念の中で、村上に目を向けて村上との関係性を構築していこうと思う個人個人が関わっていきたい所は違うだろうと思っていますが、逆にこちらサイドから申し上げますと、実は関わっていただきたい「しろ」がたくさんあるので色々な所に来ていただきたいというイメージがあります。総じて一言で言うと、担ってくれる場所、担い手というのが非常に重要だと思っています。ただ、村上市が思い描く担い手ということと、関係性を持ちたい方々が感じている関わっていきたい所のマッチングが非常に重要だと思います。長く継続しているののを見てみると、地域がしっかりと受け止めて本人がやりたいことが少しずつ前に進んで成功しているような所です。例えばカヌー・カヤックで全国を歩いたけれど村上の地が良いということで移住につながった方がおり、その方が先ほど写真でご紹介した海岸線笹川流れという所で色々なツーリズムを発信しています。それを見ると、こういった所が魅力はあるけれども発信していないので関係しろにつながっていない所もあると感じています、そこも含めて、これから村上市の魅力の部分の少し磨き上げながら発信して、そこが関係しろにつながってくる仕組みづくりも必要かと思っています。比較的、そういう意識をしている方々は結構いますので、インフルエンサーの皆さんにもどんどん発信していただくことにより、たくさん目に触れることが必要だと思っています。

指出先生：

素晴らしい言葉がご発言の中にありました。関わってもらいたいしろはとても大事だと思います。これまで添田村長と高橋市長にそれぞれ天栄村と村上市の関係人口の動き、それから関わり方の段階のお話を聞かせていただきました。

まとめさせていただくと、村と市でそれぞれの課題に対しての関係性をいかにして若い人たち、地域にやって来る人たちと作るかということが多様にあったかと思います。天栄村さんの場合は、関係人口の先駆けである田んぼのパートナー制度から始まって、村と企業と大学生の連携という三方良しの新しい形の関係人口や関わりしろを作る取り組みなどを含めて、この先5年10年先まで見据えた取り組みを行っていらっしゃると感じました。そして村上市の高橋市長のお話の中で、元々村上は鮭の産業としてサステナビリティをきちんと作られている場所ですから、サステナビリティという中で関係人口をどう考えるかということをお話ししてくださったと思います。関わりしろの話でありましたが、屏風まつりのように伝統の中で新しいお祭りや新しい関わりしろを作ることで、若い人たちに新たに「村上しろ」を見つける仕組みをうまく作られているのではないかと思います。双方に感じられるのは、地域そのものに対してうちはこういうものが沢山あるというような強いアピールばかりではなく、若い人たちがやって来やすいような素地を双方の首長が自ら見つけて提案される中で、大学生をはじめとした若い人たちが関わり方の段階を上れるような柔らかない

ステップを作られているのではないかと思いました。関係人口の議論に関しては、色々と話が進んでいる所がありますが、例えば天栄村さんの場合には僕の尊敬してやまない田中輝美さんがお話をしに行かれて、そして、尊敬してやまない徳島大学の田口太郎さんが村上市の高橋市長の所にいらっしゃって一緒に設計する形で地域の若い人たちが入ってくる流れを作られているという偶然の出会いがあります。先ほど私は若い人たちが地域を見つける視点を持つことは重要だというお話をしましたが、若い関係人口の皆も偶然の出会いにときめいてほしいのと同時に、その偶然の出会いを必然的に作るのが首長をはじめとする行政の皆さんであったり、私のような企業の間人だったかと思しますので、村上市や天栄村をときめく想いで私が見つけた素敵な天栄村だ、素敵な村上市だと思っていただく施策が色とりどりにあると非常に思いました。引き続き、ぜひ関係人口をつくり育てていくお力添えをいただけたらと思います。最後に一言ずつ、折角ですからお二人からメッセージや感想をいただいてもよろしいでしょうか。

添田村長：

今回、このようなご縁を頂いて村上市さんとまた良い関係で、人からものへ、ものから人へということを取り組んでいければと思っています。今日、私は村上市さんの話を聞いて、また指出先生のお話を聞いて大変勉強になりましたので、今後関係人口をさらに深めていきたいと思っています。ありがとうございました。

指出先生：

ありがとうございました。では、高橋市長お願いいたします。

高橋市長：

まず全国市町村長サミット 2021 in 福島で発言の機会をいただきまして本当にありがとうございました。天栄村の添田村長から色々な良いお話も頂きました。またコントロールいただきました指出先生、本当にありがとうございました。また色々な所でご知見を披露いただければありがたいと思っています。また多くの市長村長の皆さんと課題を共有していくために、今回はウェブですが、落ち着けばまたリアルで議論をさせていただくような機会ができてくると思っていますので、1つの自治体だけでは中々難しい所も連携をする、関係性を強化する中で強い地方が出来上がっていけばと思っています。これからも引き続きよろしくご指導をお願いしたいと思っています。本日は、本当にありがとうございました。

指出先生：

ありがとうございます。今回、第3分科会関係人口のつくり方第1部は、福島県の天栄村の添田村長と新潟県村上市の高橋市長のお二人にお話をお聞かせいただきました。改めて感謝申し上げます。この後第2部が始まりますが、改めてお聞きになって、またチャット

などへも書き込んでいただいて、先ほどの高橋市長のご発言のように、あれこれと皆でお話ができるとより良いかと思しますので、ぜひ発言いただければと思います。では、1部をこれで終わりにしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。お疲れ様でした。

司会：

指出先生、添田村長、高橋市長、ありがとうございました。以上をもちまして、第3分科会関係人口のつくり方の第1部を閉会とさせていただきます。